

チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝

特別支援教育支援員に期待すること

1 よきモデル

- ・子どもはいつも見ている人・ものに心が似てくるので、支援員がよきモデルを示す。子どもは、大人の言うことを聞かないが、大人のやっていることを学んでよくまねをする。

2 よき理解者（子どもに一番近い存在）

- ・子どもの特性に共感し、見方を変えて味方になる。足し算しかできない子どもではなく、足し算ならできる子どもという見方をする。子どもは評価されたように育つので、よいところに注目して肯定的な言葉をかける。

3 よき支援者

- ・必要以上に声や手をかける傾向が見られる。できていないことへの注意は最小限にとどめ、できていることに注目し、すぐほめる。笑顔やアイコンタクトなどの非言語メッセージや、見守る・待つことも支援となる。

4 よきつなぎ役

- ・支援対象児の抱える困り感は、対象児とうまくつながれない周囲の困り感でもある。対象児と周囲の子ども・授業・担任・保護者など、「つなぐ役割」を果たしてほしい。対象児と周囲がつなげれば、子どもは変わる。

相談・支援活動より

〈特別支援学級が新設されたある小学校のエピソード〉

- ・4月当初、特別支援学級のA君は、自分の意思をうまく言葉で伝えられず、授業中に大声を出したり、飛び出したりしていた。周囲の子どもたちは、いつも担任の関わり方を見ていた。ある日、A君が体育館にある一輪車に興味を示していた。その姿を見付けた周囲の子どもたちは、A君の体のサイズに合った一輪車を選んで渡した。笑顔を見せたA君に、周囲の子どもたちも笑顔で応えた。A君の存在が、周囲の子どもの成長につながっている。また、教師の関わり方が、周囲の子どもに影響を与える。教師が大切にしていることが、子どもの行動に表れる。

〈スムーズな移行期支援を目指して ～6つの秘策～〉

- ・毎年3月から4月に、保護者や学校からの依頼を受けて、進学先に子どもの検査結果や特性を伝える機会がある。途切れない支援ができる体制づくりやツールの工夫が課題となっている。
- ①支援員の配置や診断名の有無にかかわらず、合理的配慮を必要とする子どもの「個別の支援計画」を引継ぎ資料としても活用する。
- ②地域の生徒指導主事や養護教諭の連絡会で情報交換を深める。
- ③各市町村が「就学支援シート」を作成して、幼保から小学校へのつなぎ役を担う。
- ④支援を必要とする子どもの情報共有や、関係機関の役割分担ができるように、市町村単位の早期からの相談体制づくりや連携協議会の設立を目指す。（福祉と教育の連携画が不可欠）
- ⑤各地区で校種を超えた授業参観、情報交換の場を設ける。
- ⑥保護者が持っている「かがやき手帳」や「サポートブック」を活用する。